



## 저작자표시 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.
- 이차적 저작물을 작성할 수 있습니다.
- 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#) 

碩士學位論文

キム・ミギョンのリポート

(김미경의 리포트 翻譯論文)

濟州大學校 通譯翻譯大學院

韓日學科

佐々木法義

2021年 8月

# キム・ミギョンのリポート

(김미경의 리포트 翻譯論文)

指導教授 坂野 楨治

佐々木 法義

이 論文을 通譯翻譯學 碩士學位 論文으로 提出함

2021年 8月

佐々木法義의 通譯翻譯學 碩士學位 論文을 認准함

審査委員長 \_\_\_\_\_ (印)

委 員 \_\_\_\_\_ (印)

委 員 \_\_\_\_\_ (印)

濟州大學校 通譯翻譯大學院

2021年 8月

## 역자서문

2020년 1월 갑작스럽게 나타난 코로나19는 순식간에 세상의 풍경을 바꿔버렸다. 평소 사람들로 북적거리던 대도시 변화가는 텅 비었고 마스크를 구매하려고 쟁탈전이 벌어지고 주가는 폭락했다. 나도 예외가 아니었다. 학교 수업이 비대면 방식으로 바뀌었고 사회적 거리두기라는 새로운 개념이 생겼으며 사람을 만나기조차 어려워졌다. 일상적으로 마스크를 써야 하는 날이 올 줄은 상상도 못했다. 또한, 가까운 이웃 나라인 한국과 일본뿐만 아니라 전 세계 어느 나라든 예전처럼 쉽게 오갈 수 없게 되었다. 나날이 급속도로 변화하고 있는 세상 속에서 나는 앞으로 어떻게 살아가야 할지 깊은 고민에 빠졌다. 그러던 어느 날 아무 생각 없이 들렀던 서점에서 ‘코로나로 멈춘 나를 다시 일으켜 세우는 법’이라는 제목의 책이 눈에 들어왔다. 웬지 내 고민에 대한 답이 있지 않을까? 싶었다. 동시에 같은 고민 속에서 힘들어하는 사람들과 함께 이 책을 공유하고 싶다는 생각이 들어서 번역하기로 했다.

이 책에서 코로나19가 불러일으킨 변화와 혼란 속에서 어떻게 살아가야 할지에 대한 답을 찾을 수 있을 것이다. 이 책은 달라진 세상에서 개인의 삶과 성장에 대해 본격적으로 다루고 있다. 코로나19 이후 많은 것을 잃는다 하더라도 자신의 생존만은 잃을 수 없다. 살아내는 것만은 양보할 수 없다. 어떤 세상이 온다 해도 우리는 살아나가야 한다는 강력한 메시지와 함께 독자에게 희망과 용기를 준다. 우리의 미래를 위해 이 책이 조금이나마 도움이 되기를 바란다. 끝으로 이 번역 논문에 아낌없는 열정으로 지도와 조언을 해주신 교수님들, 그리고 늘 응원해주고 도와준 동기들에게 진심으로 감사드린다.

2021년 5월

사사키 노리요시

## 국문초록

본고는 김미경 작가가 쓴 '김미경의 리부트'를 번역한 것이다. 코로나19로 인해 세상은 바뀌버렸다. 이미 세상은 예전으로 돌아갈 수 없는 상태가 되었다. 우리는 전과는 완전히 다른 삶을, 누구도 겪어보지 못한 신세계에서 살아가야 될 것이다. 보고에서는 이러한 위기 속에서 앞으로 어떻게 살아가야 할지에 대해 여러 가지 방법을 제시하며 강력한 메시지와 함께 독자에게 희망과 용기를 줄 것이다.

책 중 '프롤로그', 'Part 1. 대전환을 두려워하지 말라', '에필로그'를 번역하였다.

'프롤로그'에서는 코로나로 인해 달라지는 세상에서 작가가 깨달은 것을 독자들에게도 알리고 싶었던 심정이 쓰여 있다.

'Part 1. 대전환을 두려워하지 말라'에서는 작가가 실제 느꼈던 것들을 통해 독자들에게 새로운 세상을 두려워하지 말고 새로운 질서를 공부하면서 그 해법을 찾아내야 한다는 작가가 겪었던 것을 바탕으로 한 조언이 담겨 있다.

'에필로그'는 작가가 이 책을 쓰면서 느꼈던 마음. 그리고 독자들을 위한 응원이 가득 담겨 있다.

끝으로 코로나19로 인해 멈춰버렸던 문제없이 잘 돌아가던 인생을 다시 살려 내려면 재시동하는 방법밖에 없을 것이다. 그렇게 하려면 새로운 이야기를 시나리오로 만들어야 한다. 나만의 리부트 시나리오를 쓰는 데에 있어서 이 논문이 제대로 된 가이드가 될 것이다.

## 目次

역자서문

국문초록

프로로그..... 6

(Part 1) 大轉換を恐れるな

1. 新型コロナウイルス感染症がなかった頃に戻れるだろうか.....	13
一時的ではなかった始まりだった.....	13
「コロナウイルスは決して終息しない」.....	15
新型コロナウイルス感染症がもたらした巨大な「ティッピング・ポイント」.....	17
2. 混沌の中に潜む新たな秩序.....	19
新型コロナウイルス感染症は危機ではない、混沌だ.....	19
混沌に対する固定概念を破れ.....	20
新たな秩序をチャンスにしようとするなら.....	21
混沌の中で見つけた衝撃の真実.....	23
「構図が変わる3度目のチャンスが来る」.....	24
タイムリミットは残り少ない.....	26
3. 「講義に行けないわけではない。行かないのだ」.....	27
あなたは新型コロナウイルス感染症を「心で」受け入れたのか.....	27
お金持ちだけが知る「ハイレベル情報」.....	29
教育と不動産の公式が変わる.....	30
「江南不敗」神話が崩れる.....	31
「できない」ではなく「やらない」と宣言しろ.....	32
エピローグ.....	35
日本語抄録.....	39

## プロローグ

### 私の気付いたことにあなたも気付きますように

2020年1月22日、新年を迎えまもなく、私は今年最後の講義を行った。その時は最後だなんて思いもしなかったが、私にとってその日が最後となった。全ての人々に凶らずも「最後」となった「その日」がある。マスクをせずに地下鉄に乗ったその日。賑わう映画館で恋人とくっついて映画を見たその日。今年の夏休みはどこへ海外旅行に行こうかワクワクしていたその日のことだ。

新型コロナウイルス感染症は、講師として生きてきた私の人生を全て変えてしまった。私は28年間、休むことなく講壇に立ち続けてきた。何が起ろうとも1週間以上、講義をしないことはなかった。こんなにも為す術なく、何もできなかったことは初めてのことだ。私の仕事は初めて何の手立てもなく「完全」にストップした。

初めは数日間で済むだろうと思った。2月に差し掛かり「これは深刻だな。長引きそうだ」と思った。不安が押し寄せた。朝起きると、今日のスケジュールが待っていた私の日常はそのまま消え去った。私のスケジュール、私の車、そして、私自身も一瞬にしてストップした。

「代表、このままではダメです。」

2月も残すところあとわずかという頃、会計を担当しているチェ（崔）副社長が、遠慮がちに話を切り出した。

「今ある会社の資金では1～2か月は耐えられますが、それ以上は難しいでしょう。」

私が運営するコンテンツ会社では、約20人の社員が働いている。社員は私のコンテンツを編集し、お客様に届ける仕事をしている。ユーチューブチャンネル<キム・ミギョンTV>とオンライン大学<MKYU大学>があるが、始めてまだ3年も経っていない事業で、少ない社員を養うにはかなり厳しい状態だった。この間、私たちの会社の最も古くてしっかりした収益源は私の講義だった。そのため、私の講義がストップしたということは即ち、会社の経営が危うくなったということだ。

社員に給料を支払うのもかなり厳しいということ、会社の通帳の残高が底をつきかけているということ、社長にとってこれらのことは死亡宣告と言っても過言ではない。しかし、時間が経っても講義を再開できる兆しが見えなかった。私が行う大規模な講義はなおさらだった。不安と焦りの日々を送っていたある日の朝、思わずこんな言葉が私の口から漏れた。

「どうか今回だけはお守りください。私たちの社員がたったの一人も欠けることのないよう、私の願いを一度だけ叶えてください。」

私は見つけ出すしかなかった。この危機を乗り越える方法、社員を守り抜く方法を。その日から、私は今までとは違った朝を迎え始めた。感染力の強いこのウイルスが与えた宿題を解くしかなかった。57年生きてきて初めて出会う問題を解くために、私は万全の準備を整え始めた。

まず、新聞2紙を購読した。日々変化する世界の隅々まで一つ一つしっかりと目を通し、端緒を収集することを始めた。週刊誌も2誌購読した。問題をしっかり理解するため、深層取材した記事を読んでいった。国内外のビジネスコンサルティング会社のレポートを受け取って読むためメール定期購読サービスも申し込みした。アメリカで大学の教授をしている弟にアメリカからの資料を毎日アップデートしてくれるように頼みもした。

小さな端緒も見逃さないようにと、経済、経営、トレンド、技術、人文、歴史、パンデミックをテーマにした関連書籍を毎日読んでいった。情報と知識を得るほど「人物」という端緒が目にとまり、1週間に最低3～4人の専門家に直接会い、インタビューをした。私の脳と体は講演を行う時より、むしろ忙しく動いていた。少しの寝る時間を除いては端緒を探し、アイデアをノートに書きとめ、ソリューションを考えることに1日の大半を費やした。時間を分刻みで使った。体が四つあっても足りないほどだった。「新型コロナウイルス感染症後の世界で生き残る方法」を編み出すため必死にもがいた。

1か月余りが過ぎ、その端緒を掴み始めた。自分だけの「コロナウイルス・ソリューションノート」が半分以上埋まっていた。毎日新しい端緒を探し、明日と結び付けては分解し、再び組み合わせる過程は、まるで科学者の実験ノートみたいだった。さらに1か月余りが過ぎ、少しずつ希望が見え始めた「これは単なる危機ではない、異世界への扉だ」という確信を得た。見れば見るほど、一つの単語が明確になっていった「混沌からの秩序」まさにこれだった。商店と工場が閉っている状況でもむしろ成長する企業があり、閑散とした通りは装いを新たにしている。新たな兆しと現象で全世界が慌ただしい。小さいがはっきりしたシグナルを集め、

組み合わせてみると、隠れていた秩序が徐々に輪郭を現し始めた。

新型コロナウイルス感染症という混沌の中で作られている新たな秩序。以前と異なる世界で生き残る方法。正確に言えば「私、<sup>キム・ミギョン</sup>金美暻が生き残る方法」が鮮明に現れた日、私は社員と夕食を食べながら言った。

「新型コロナウイルス感染症以降は、全く異なる世界よ。生きていく公式、お金を稼ぐ公式が全く違うの。その中でも、私が発見した四つの公式で私たちはまた生き残る。そのために、まずやるべきことがあるわ。新型コロナウイルス感染症以前に行っていた事業方式を完全に「リセット」する必要があるの。もったいないと思わずに必要なものは全て初期化しましょう。これから私たちがすることは「リポート」よ！」

その後、数か月にわたり、私たちの会社は事業別にリポートに取りかかった。整理するものはしっかり整理して、変化した世界に合わせ、新しい事業を始めた。四つのリポートの公式に沿って。幸運にもコロナ禍が5か月目に差し掛かっている今日まで、私たちの会社は危機を乗り越え、順調に進んでいる。社員が一人も欠けることのないようにしてくださいという私の祈りは現実のものとなった。むしろ新たなビジネスが大きくなり、毎月新入社員が入社している。講義は相変わらず1件もないけれど、別のやり方で世界と繋がる方法を編み出したおかげだ。

目の前の問題を解決してみればじめて、周りの人たちが目に入ってきた。いつも私を見守り、応援してくれる110万人の<キム・ミギョンTV>のチャンネル登録者と<MKYU大学>と一緒に勉強する1万人の学生も新型コロナウイルス感染症によって様々な打撃を受けた。在宅勤務の最中に解雇通知を受けたシングルマザー、オープンして1か月でお客さんがばたつと途切れた飲食店のオーナー、パッケージツアーが全てキャンセルになった後、返金の問い合わせに頭を悩ませる小さな旅行代理店の社長まで、私のように突然仕事が無くなったり、職を失った人々は数えきれないほどだった。さらに大きな問題は、今後どのようにこの状況を打破していくべきなのか、その道を見つけれずにいるという事実だった。新型コロナウイルス感染症が早く収束し、元通りになることを願っていたり、自責の念と喪失感で自らを再び奮い立たせる力を失っていたりした。

私のそばで苦心している人々を見て私は決心した。本を執筆しなくては何と。私が気付いたことをもっと多くの人々と「一つ一つしっかり」と共有しなくては。自分のためだけのソリューションを出すことにとどまらず、私が愛して励ましたい人々全員がそれぞれの仕事と人生を見つけ出せるように手伝ってあげたかった。

新型コロナウイルス感染症以降の世界に関する研究をした本は、すでに何冊か出版されている。しかし、私はこの未知の世界と自分の人生を結び付け「そうだとしたら、自分はどのように生きて行くのだろうか」ということに対する答えを一緒に探し出す本、変わった世界で個人の人生と成長の問題を本格的に取り上げる本を執筆したかった。

もちろん本の執筆はかなりの肉体労働である。もっと思考を広げて、もっと研究を深めて、何倍もの資料を探して、自分の考えが合っているのか、他の人々の人生にも当てはまる可能性があるのか、絶えず検証しなければならなかった。本を執筆していた2か月間はあまりにも没頭しすぎて耳鳴りがして、急性角膜炎にもなり、肩さえも外れるかと思うほど痛かった。やはり歳には勝てなかった。周りからはなんで苦勞を買ってまでするのかと言われたが、57歳の私がこんなにもお節介を焼くのはあまりにも心配だからだ。私が自分の仕事と会社、自分の人生と家庭を守りたいように、切羽詰まった気持で1日を生き抜いている人々がまるで自分の姿のようだったからだ。

この本は五つのパートで構成されている。

Part 1 の重要なメッセージは「全ての混沌には秩序が隠れている」ということだ。新型コロナウイルス感染症が引き起こした危機の中で混沌だけを捉えて、徐々に生まれている未来の秩序を見逃せば、私たちは戦わずして負けることだろう。それゆえに、この危機を克服する最初のカギは混沌の中に飛び込んで秩序を探し出す方法にある。

Part 2 では「人生を変える四つのレポート公式」を提示する。「レポート公式」は、混沌の側面から見ると新たに生まれている秩序で、個人の観点から見ると新たな世界に進むために通過すべき扉である。このパートで提示する四つの公式はこの5か月間、私が未来の計画を立てるたびにビジネスのフレームにしてきたもので、計画の完成度を高め、リスクをチェックするたびに基準になってくれた方式である。アンタクト1)、さらにはオンタクト2)、デジタルトランスフォーメーション3)、インディペンデント・ワーカー4)、そしてセーフティーという、四つのレポート公式を無事に通過した個人や事業は、新型コロナウイルス感染症以降の世界で成功する確率が高い。

---

1)訳注 英語の「un」と「contact」の合成語で「非対面」という意味

2)訳注 外出できない人がオンライン上で外部と繋がって各種活動を行うこと

3)訳注 「デジタルによる変革」という意味

4)訳注 「雇われずに働く独立労働者」という意味

Part 3 では「レポートのシナリオ」を一緒に書く方法について具体的に取り上げる。自らを再び奮い立たせるために必ずすべきことは、自分だけのオリジナルを書くことだ。知って理解する水準では自らを再び奮い立たせることはできない。今、この瞬間にも世界各国の企業、研究機関などでは「新型コロナウイルス感染症以降、どのように生き残って行くのか」に対するシナリオが溢れ出ている。企業別、産業別に数億、数十億ウォンのシナリオを数回にわたり書いている最中だ。数十社の企業のシナリオを研究してみたところ、頭の中に一つの疑問がはっきりと浮かんだ。「うらやましい。みんな賢くて。でも、私たちのような個人はどうしたらいいの？ 私はどうすれば？」誰も個人の問題について深刻に目を向けて数十億ウォンのシナリオを書いてはくれない。自分のシナリオは自らの手で書く必要がある。

Part 4 では雇用を守るために「ニューラーナー」<sup>5)</sup>になる必要があるという意味を込めた。昨今のデジタル転換期では、勉強しなければ「不要階級」に転落しやすい。大卒というだけで一生暮していけた過去とは違い、変化の激しい時代には素早く学び、すぐに使いこなす「即時的な教育」が必要である。私は即時的な教育であらかじめ将来を見据えて勉強し、仕事に取り入れる人を「ニューラーナー」と呼んでいる。全然知らないことだらけでも即時的な教育でいくらかでも補えるため、心配しなくても大丈夫だ。このパートでは生涯、トレンドを逃さないために勉強してきた私だけのノウハウを基に、どんな心持ちでどんな勉強に投資し、どのように勉強すべきなのか、ニューラーナーに生まれた変わる方法を惜しみなく共有しようと思う。

最後に、Part 5 では「ニューヒューマン」<sup>6)</sup>が持つべき人生の問いについて取り上げる。新型コロナウイルス感染症以降「どのように生き残るのか」という問いと共に、私たちは「新型コロナウイルスを引き起こした根本的な問題が何なのか」という問いに必ず答えなければならない。この災禍は私たちの世代が豊かに暮すため、タダで環境を闇雲に使い、さらには次世代を担保にして未来の環境までも前借りし、使ってきたせいで起ったのだ。子供たちに生涯ウイルスと共存しなければならない悲劇を味合わせたくなければ、私たちが立ち上がる必要がある。私は生態学者や環境運動家ではないが、子供たちがよりよい未来を夢見ることができるように環境を救う小さな実践を日頃の習慣にする必要があるところに大きく感化された。私たちの強欲が新型コロナウイルス感染症という悲劇的な結果を生んだからだ。また、この災禍を前にして「どのように私たちの気持を奮い立たせ、自らに勇気と希望を与えるのか」という問いにも答

---

5)訳注「新たな学習者」という意味

6)訳注「新人類」という意味

えようと思う。「コロナブルー」が私たちの心を蝕んでいる最近、体の免疫力と同じくらい重要な心の免疫力をどのように高めるのか、お互いを励まして気遣い、信頼を与える「関係の生存」について話そうと思う。物理的な生存と同じくらい大切に守るべきものが人間の尊厳であるからだ。

私はこの本を過去の自分の本とは全く違う気持で執筆した。私がこれまで経験し、知ったことを整理した過去の本とは違い、この本は私もまた生き残るために洞察し、研究した力で書き下していった。今までこんなにも切迫感を持って傾注し、自問自答しながら自分のソリューションを見つけ出したことは初めてかもしれない。この方法を見つけ出すたびに「エureka」と叫んだ。この混沌の中で秩序を見つけた時に感じた安堵感、混沌をくぐり抜ける四つの公式を発見した時の大きな喜び、変わった世界で私はどのように生き残るだろうかということに対する答えを見つけた時に溢れ出た自信、私が気付いた全てのことがしっかりと読者のものになることを切実に願っている。

新型コロナウイルス感染症以降、私たちはすでに多くのものを失った。今やマスクなしでは公共交通機関を利用できないし、子供たちは心置きなく遊び回ることもできない。授業が減ったのはもちろん、好調だった仕事が突然ダメになることも経験した。しかし、多くのものを失ったとしても私自身の生存だけは失うことはできない。百歩譲っても生きること、生き抜くことだけは譲れない。どんな世界になろうとも私たちは生き抜かなければならない。

今こそ「一時停止」をやめて「リポート」すべき時だ。挫折せず、心配せず、傷つかず、引き下がらず、リポートしよう。まだ私たちには希望がある。

2020年 6 月

キム・ミギョン

「いつ元に戻れるだろうか？」と問いかける時は過ぎた。  
大きく深呼吸して「来る未来のために何を準備すべきだろうか」と問いかけ続けなければいけない時だ。毎日少しずつ変化の端緒を探し出さなければいけない。  
食べて、生きて、学んで、分かち合う日常を享受するため、別の人生の 방식을訓練する必要がある。人生に対する誠実な姿勢と強い愛着で、各自の解決法を見つける必要がある。

## (Part 1) 大転換を恐れるな

### 1.新型コロナウイルス感染症がなかった頃に戻れるだろうか

一時的ではなかった始まりだった

「これはいつ頃、終わるのでしょうか」

今年の初め、会う人会う人がこの質問を挨拶代わりにした。

「そうですね。1～2か月もすれば落ち着くと思ったのですが…。」

答えもほぼ同じだった。すっきりと答えてくれる人は誰もいない。

その次は、互いに慰め合う段階だ。

「大変でしょう？ 新型コロナウイルス感染症のせいで…。」

「最近、大変ではない人はいないですよ。少しだけ耐え凌げば良くなるでしょう。」

この時までは、私たちにも希望があった。余裕もあったと思う。しかし、それから数か月が過ぎた今、このような会話をする人は見かけない。程度の差はあるにしても、みんなそれぞれの「パニック」を経験している。

「このままでは全てがダメになってしまいます。自営業は廃業していて、企業も倒産の一手前です。落ち着いたかと思っても、感染者が一人でも出ればまた麻痺して…。このままでは本当に来年までかかりそうです。」

私たちは本能的に感じている。コロナ禍で何だかとても不安な変化が起きているということ。ところが、変化はシルエットだけぼんやりしていて、あまりにも変化が激しく、形を予測することは難しい。一寸先も見えない砂嵐の中で何とか立っている感覚。それが、私たちが置かれている現実だ。それにも関わらず、まだ諦めきれない一つの質問がある。

「新型コロナウイルス感染症以前に戻れますよね」

数日前、長い付き合いの後輩に会った。この後輩は、企業イベント分野で経験豊富なベテランだ。ワークショップや社員の研修などの教育プログラムから、製品を広報するためのプロモーション活動まで、企業イベント分野では実力者として知られている。事業を始めて2年で約50人まで会社を大きくさせるほどの情熱と手腕が優れた人物だ。しかし、後輩は新型コロナウイルス感染症という突然の不確定要素の前で、まともに立ち向かうこともできずに一気に傾いた。

「正直、1～2か月だけ耐えれば、よくなると思っていました。ところが、だんだんと悪くなる一方なんでよね。私たちの会社の仕事というのは多くの人々を1か所に集めてイベントを行うものです。以前も、社会を揺るがす災禍や突発的な状況に立ち向かってきましたが、本当に今回のように為す術なく打ちのめされるのは初めてです。先週、社員数人が私を訪ねてきて言うのです。会社の状況が厳しいので自分たちが辞めますと、後に落ち着いたらまた雇ってくださいと…。どうにかしてもう少しでも耐えようとしたのですが、本当に何の希望も見えません。1日に何度も、ぐっと込み上げてきて…」

数週間前、大学で教鞭を執る同級生にも会った。もう57歳で、定年まで残り8年ほどの教授だ。大学ではオフラインでの開講ができないので、オンライン授業に適應するため、むしろ忙しかったそうだ。

「いつかこんな時代が訪れるだろうとある程度予測はしていたが、こうしていきなり訪れると困惑するね。最近、オンライン授業を行うせいで教授たちは大忙しだ。はじめは、また元に戻るだろうと思っていたが、ただ事ではない。このままだと年末までずっとオンライン授業をしなければならぬかもしれない。オフラインで開講をしたとしても意味がない。教室で感染者が1人でも発生すれば、すぐにオンライン授業に戻るのだから。大学も、教授も、学生たちも、どんな環境で教え、勉強すればいいのか本当にパニックそのものだ。」

実力があって情熱的な事業家も、聡明で分析力のある教授も、新型コロナウイルス感染症の前で立ちすくんでいた。どこへ行くべきなのか、行く先を見つけることはおろか、1日を生き抜くことだけでも手一杯だった。私もやはりまた、この状況では例外ではなかった。1月22日の講演を最後に、今日まで一度も壇上に上がることはなかった。

「院長、いずれにしても人々は集まること自体に慎重な雰囲気なので、しばらくの間は講演を行うことは難しいでしょう。雰囲気を見て、またご連絡します。」

「そうですね。落ち着いたら、その時に会いましょう。」

企業の講演担当者と私はこのような未来が来るとは全く想像もできないまま、しばらく休もうか程度だけの挨拶をして別れた。半強制的な休暇だったが、私は最初の1 か月はゆっくり過ごした。貯金から社員の給料を支払い、すぐ良くなるだろうと待った。かくして1 か月が過ぎると、突然怖くなり始めた。

「このまま永遠に元に戻ることはないのでは？」

ひょっとしたらもう以前の生活に戻れないかもしれないという不安から、何かしなくてはという心情で勉強を始めた。私は勢いよく減る通帳の残高を見ては、明け方まで眠れなかった。私と家族と会社の生存が掛っているだけに、本当に追い詰められて切実だった。人はお金に困っている時、1 番勉強が捗るという言葉は真理だ。かくして数か月間、数千枚のレポートを読み、各界各層の専門家たちに会って、新聞を毎日隅々まで読み、新たな世界の端緒を探し回った。そして、はっきりとした結論に辿り着いた。その後、私は「この状況がいつ終わるのだろうか」という人々の問いに、このように答え始めた。

「残念ですがいくら耐え凌いでも、新型コロナウイルス感染症以前の世界には戻れません。戻れたとしても私たちが知っているその世界ではないでしょう。すでに私たちは違う世界で暮らしています。」

### 「コロナウイルスは決して終息しない」

新型コロナウイルス感染症が本格的に猛威を振るっていたその頃、聞き慣れない「ソーシャルディスタンス」という警告が全世界で広がった。皆さんがご存じのように、新型コロナウイルス感染症の特徴は感染力が極めて強いことだ。死亡率は高いが感染力の弱かった「重症急性呼吸器症候群(SARS：サーズ)」や「中東呼吸器症候群(MERS：マーズ)」とは違い、新型コロナウイルス感染症はたった一人の感染者により、一度の集会などで数百人が感染するほど拡大力が強い。このような新型コロナウイルス感染症の感染力は、一気に私たちの社会をバラバラにしてしまった。ソーシャルディスタンスだけが新型コロナウイルス感染症の猛烈な感染力に対応できる最善の選択だった。

しかし、ソーシャルディスタンスを維持し、数か月間を過ごしてみると、全く生きている気がし

なかった。いつまでこのように暮らさなければならないのだろうか。ワクチンができれば本当に解決するのだろうか。考えれば考えるほど疑問が深まっていった頃、梨花女子大学の崔載千<sup>イファ</sup>碩<sup>チエ・ジエチョン</sup>座教授<sup>7)</sup>に会った。教授であれば、私たちが気になっている新型コロナウイルス感染症の本質について、そしてこれからの未来について、すっきりと説明してくれるだろうと思っていた。

「教授、私たちはいつ以前の日常に戻ることができるでしょうか。」

「新型コロナウイルス感染症は少し収まるだけで、決して終息しません。人々は終息という言葉を知りたいのでしょうけど、ウイルスがどうしたら完全に終息するというのでしょうか。」

「そうだとしたら、ずっとこのように暮らさなければならないのですか。」

「今みたいに人間が生態系を破壊して、それにより気候変動が続けば、コウモリ以外にも多様な生物が致命的なウイルスを持ち、2～3年の感覚で人類を襲うでしょう。人間がワクチンを開発する速度よりも、ウイルスが襲いかかってくる速度の方がはるかに速いということでしょう。」

「そうだとしたら、私たちはどのように生きるべきでしょうか。」

思わず焦燥感が口から飛び出た。

「私はソーシャルディスタンスを「行動ワクチン」と呼んでいます。現在、私たちが選択できる唯一のワクチンは行動ワクチンしかありません。おそらくこれから私たちはソーシャルディスタンスのような形でウイルスと共存する方法を学ぶ必要があります。」

一生を生態学者としての使命感で生きてこられた崔教授は、心の底から私たちに助言してくださった。教授と別れた後、ずっと頭の中に残っている一つの言葉がまさに「共存」だった。今の状況が「一時的」だという幻想も次第に消えていった。

実際、多くのメディアが新型コロナウイルス感染症の第2波、第3波について報じている。今秋にもう一度襲来するかもしれないし、来年の春にも終息しないという見通しが増えている。第1波は小規模で始まったが、第2波が襲来すれば、すでに全世界に広がっているウイルスがさらに広範囲で流行するという予測だ。本当に悲観的だが、今までの事実関係から鑑みても予想可能な現実だ。私たちの希望とは違い、この災禍は今年中に解決することは難しいだろう。少なくともワクチンが開発されて、私たちのもとに届くまでは続くだろう。果たして来年の下半期には終わるだろうか。その頃には、すでに私たちは「別の世界」に移住を終えているこ

---

7)訳注 寄付金で研究活動をするように大学が指定した教授

とだろう。

## 新型コロナウイルス感染症がもたらした巨大な「ティッピング・ポイント」

最近、私たちは以前と全く別の世界を経験している。そして、時が経つにつれて社会全般で新型コロナウイルス感染症がもたらした「ティッピング・ポイント」が現れている。新型コロナウイルス感染症以降、最も多く登場する記事のタイトルは「新型コロナウイルス感染症で早まった」から始まる。「新型コロナウイルス感染症で早まったロボットとドローンの時代」、「新型コロナウイルス感染症で早まった遠隔医療」、「新型コロナウイルス感染症で早まったエドテック」<sup>8)</sup>、「新型コロナウイルス感染症で早まったデジタル通貨」など、早まった未来がどれほど多いのか、ジェットコースターに乗っているようで頭がくらくらするほどだ。記事の内容はそれぞれ違うが、キーポイントは同じだ。

「新型コロナウイルス感染症によって非対面・非接触が一気に広がり、関連事業の投資と成長に弾みがついている。」

数年をかけてゆっくり進んでいた変化が新型コロナウイルス感染症によってティッピング・ポイントを迎えている。ティッピング・ポイントとは、ある現象がかなりゆっくり進行していたが、ある瞬間バランスが失われて予想だにできなかった爆発的な変化が起る時点のことをいう。ある些細な事件がきっかけとなり、全社会的な現象として爆発力を持つようになることである。

『ティッピング・ポイント』の著者マルコム・グラッドウェルは、これを「社会的伝染」という概念で説明している。彼によれば、全ての社会的伝染には発病する限界点、つまりティッピング・ポイントがある。ティッピング・ポイントはマーケティングにも当てはめることができるが、多くの人々が製品やサービスを購入してトレンドになる時まで、即ちティッピング・ポイントが起るまで集中的に宣伝し、販売することがマーケティングの役割だ。ところが、今回は一銭も掛けずに全ての産業でティッピング・ポイントを迎えた。新型コロナウイルス感染症が「全世界のマーケット」の役割をしたわけだ。

5月『ウォールストリートジャーナル』は「恐怖に怯えた世界が医薬品から食べ物に至るま

8)訳注 教育 ( education ) とテクノロジー ( technology ) を組み合わせた造語

で、全ての物を安全に届けるために、ロボットとドローンを活用する速度が早まった」と報道した。四足歩行ロボット犬「スポット」は患者に近づき、遠隔で医療関係者と対話できるように中継をする。ドローンは患者のサンプルを医療関係者に届ける。新型コロナウイルス感染症と同時に医療現場で起っていることだ。

新型コロナウイルス感染症が早めた未来は、私たちの社会の全ての領域を急襲している。対人関係はオンラインに代替され、医療にはロボットが追加された。教育は学校ではなく、オンラインプラットフォームを求めており、働く空間も職場から自宅に移っている。分野ごとにそれぞれティッピング・ポイントを迎え、私たちは引き返せない新たな標準、即ち「ニューノーマル」時代<sup>9)</sup>を迎えている。

ノーベル物理学賞の受賞者であるフィリップ・アンダーソンが1972年に発表した『More is Different(多は異なり)』という論文のタイトルは、このような現象を正確に指し示している。巨大な一つが流れを変えるのではなく、小さなものがたくさん集まれば質的に別の世界が開かれる。小さなものがたくさん集まった状態「多」が私たち個人だとすれば、「異」は変わった世界の現象である。新型コロナウイルス感染症以降、危険を避けて安全を選択した個人が集まり、世界を変えている。正確に言えば、世界が変わるのではなく、私たちが世界を変えている。このまま1年ほど過ぎれば、果たしてどのような未来が広がるだろうか。

心が痛むが、そろそろ現実を見つめよう。「いつ元に戻れるだろうか?」と問いかける時は過ぎた。大きく深呼吸して「来る未来のために何を準備すべきだろうか」と問いかけ続けなければいけない時だ。毎日少しずつ変化の端緒を探し出さなければいけない。食べて、生きて、学んで、分かち合う日常を享受するため、別の人生の方式を訓練する必要がある。人生に対する誠実な姿勢と強い愛着で各自の解決法を見つける必要がある。

もちろん今も私は、新型コロナウイルス感染症以前の世界が恋しい、講演会場に数百人が賑やかに集まって一緒に笑い、遠慮することなくお互いを抱きしめ、背中を叩きあつたあの時間が本当に身に染みるほど恋しい。しかし、私は辛い真実を知ってしまった。戻りたくても戻れないことを、すでに別の世界に来てしまったということ。

---

9)訳注 予測できない変化が起り続ける時代

## 2.混沌の中に潜む新たな秩序

### 新型コロナウイルス感染症は危機ではない、混沌だ

「世界はこれから、新型コロナウイルス感染症以前であるBC(ビフォーコロナ)と新型コロナウイルス感染症以降であるAC(アフターコロナ)に区分されるだろう。」

ピューリッツァー賞を受賞したコラムニスト、トーマス・フリードマンが『ニューヨークタイムス』に寄稿した言葉だ。未来に執筆される歴史書にはこのような時代の区分が実際に生まれるかもしれない。私たちはすでに、アフターコロナに移ってきてしまい、生きるか死ぬか、ここで勝負をつけなければいけない。一体何をどのようにすべきだろうか。どこから始めるべきだろうか。

不安で困惑しているだろうが、生きる道を見つけようと決心すると、ぼんやりと思い浮かぶ言葉がある。1997年のアジア通貨危機と2008年の世界金融危機を経験し、私たちが本能に刻んだこの言葉。「ピンチは即ちチャンスだ！」

全ての人がピンチが近づくと思い浮かぶ一言。あまりにも聞きすぎて、覚えたも同然の言葉だ。しかし、世界で一番無力な言葉はただ単に「覚えた言葉」だ。私は生涯、自己啓発講師として生きてきたが、正直この言葉は心に響かない。「ピンチ」といえば、何だか感情的で萎縮した感じに聞こえて「チャンス」といえば、何だか運が必要なものようだ。何よりピンチとチャンスの狭間で、自分が主体となって「どのように」介入すべきなのかが思い描けない。

新型コロナウイルス感染症によってプレッシャーと焦りを感じ、私は一つの場面が頭の中に思い浮かんだ。シャワーの直後、浴室に充満する白い水蒸気。それが私の考えるピンチのイメージだ。私は心の中でそのイメージを描きながら、私だけの呪文を唱える。

「混沌からの秩序。私が必ず見つけ出す。今回は、私が必ず新たな秩序になるから見てなさい！」

## 混沌に対する固定概念を破れ

数年前、偶然にも科学の勉強に夢中になったことがあった。量子力学で宇宙の生成と消滅の原理を探求してみると、人生を見つめる視点も変わり、世界に対する洞察も深まるよう始めた勉強だった。その時、1977年ノーベル化学賞の受賞者であるイリヤ・プリゴジンの『混沌からの秩序(Order Out Of Chaos)』という本にも初めて触れた。熱力学の理論とエントロピーについての奥深い話は研究者ほど理解できるわけではなかったが、私の頭の中に強烈に突き刺さった文がある。

「混沌という単純に意味のない揺動ではなく、いつでも秩序を創出することができる、即ち秩序を『内包』した状態だ。」

この本によると、私たちが無秩序と見なしていた多くの現象が実は相当なレベルの秩序をすでに備えている。例えば、渦巻きを考えてみよう。見た目には渦巻きが混沌のように見えるが、水の分子構造を見ると話が変わってくる。お互いに遠く離れている分子の間にもそれぞれが持つ秩序があり、構造的な規則を守って配列された分子構造が見える。この事に気付くと、これまで混沌といえば思い浮かんでいた考えからイメージが完全にひっくり返った。私の目には無秩序に見える混沌の中に整然と整った秩序が隠れていたなんて！

「自然の理がそうだとすれば、私たちが生きる中で経験した数万の混沌と混乱も同様ではないだろうか。私たちの目に見えないだけですでにその中で数えきれない多くのものがお互いにぶつかり、砕けて、新たな秩序を作り出しているのではないだろうか。その躍動的な絵をあらかじめ描ければ、あらかじめ気付ければ、私もまた、世界の秩序を作り出す主体になるかもしれない。」

しばらくの間忘れて過ごしていた、それを気付かせてくれたのはコロナ禍だった。会社を救わなければいけないという重大な責任の前で、自分らしくこの危機的状況を解析して解答を見つけ出したかった。私は積んでおいた本の埃をはらって再びページを開き、かなり長い時間、混沌と秩序について思索し、悩んだ。その後、パンデミックはただ単に怖がったり、避けるべき敵ではなくなった。浴室の中の白い水蒸気のように私は混沌の状況をただ目の前に現れた一つの自然現象のように受け入れることにした。ため息をついて心配になり、気が重くなることは人だから仕方ない。しかし、感情を最大限に抑え、心の中で水蒸気を見つめ、考え続けた。

「あの得たいのしれない霧の中で、一体何が起っているのか。」

## 新たな秩序をチャンスにしようとするなら

混沌のエネルギーが大きいということは、その中に秩序の量が多いことを意味する。新型コロナウイルス感染症以降、外部から見ると社会が「一時停止」の停止線の前に止まっているようだが、内部から見ると既存の秩序と新たな秩序が絡み合い、とてつもない量の混沌の状態が存在している。混沌の中のエネルギーが大きいということは、秩序が整った時の秩序も極めて大きいことを意味する。そうだとすれば、私たちに残された宿題は混沌から徐々に整っていく秩序にどのようにして早く気づき、秩序の中に早く入って行くのか、その方法を見つけることだ。

私は秩序を見つけるため、混沌の中に存在する一つの「点」から始めた。点とは、言うなれば情報かもしれないし、知識や気づきかもしれない。一つの点を置いてそれと関連するもう一つの点を結べば「線」になる。線になった瞬間、意味の無かった点は意味を持って説明可能な状態になる。そこにもう一つの点を結べば、三つの点は三次元の立体物としてその姿を現す。そして、最終段階はこの立体物の中心に自分という個人が入って行くことだ。三つの点と自分が結ばれた瞬間、そこがまさに自分だけの秩序になる。

自分が秩序の中に入って行ったという言葉は即ち、チャンスを掴むことができるようになったという意味だ。チャンスは秩序の中にだけ存在するためだ。私は見えない秩序を見つけるためにぼんやりとした点から探してみた。そして、しばらくして私が持っている知識と情報の小さな点が徐々に大きくなってさらに鮮明になり始めた。

例えば、私が昨年頃から興味を引かれていたブロックチェーン技術がある。ブロックチェーン技術は公共取引帳簿と呼ばれるが、既存の銀行や特定の何人かの取引当事者同士だけで取引情報を保有するものではなく、デジタルネットワークに参加する全てのユーザーが取引される全てのデータを分け合って保存するため、公共のものになるという意味だ。そうした中、先日の新聞記事で「人々が感染リスクを恐れて、現金や、カードを使用することを避けている。」という内容を目にした。新型コロナウイルス感染症以降、新たに現れた現象だという

「点」とブロックチェーンという「点」を「線」で結んでみると「色々問題の多かったデジタル通貨が思ったよりも早く普及するかもしれないな」という考えに至った。

そうこうするうちに、災害支援金が全国民に支給されるという現象を目にした。人との接触を減らそうとみんなが努力している状況でも、災害支援金を申請しようとする人々が役所に長蛇の列をなす姿が見えた。このようにして、公共のお金を安全に取引するためには「ブロックチェーン技術を利用してお金をやり取り、使うことのできるプログラムマネーがすぐにできるのだろうな」という考えに至った。さらに、興味深い記事も一行目に入った。「フェイスブックで通貨の代わりに使うことのできる仮想通貨リブラが、今年中に登場する。」「ブロックチェーン」という点を皮切りに「現金の使用を避ける」という点「災害支援金」という点と「リブラの出現」という点まで加わって、「未来通貨」という立体物が鮮明になった。ここでのキーポイントは、別々に離れている点が自分という個人の視線を通過して、一つ一つ集まり立体物になったということだ。

そして、最終段階である「自分の介入」により、秩序が整う。ブロックチェーンをどのように自分の事業に適用するのか想像してみることだ。

「無形のコンテンツもデジタル通貨化されれば、自分の講義や本、もしくは動画をデジタルコインで売買できるだろう。プラットフォームに動画をアップロードして10万枚のコインに分け、100ウォンずつ投資を受けるとすれば？ その動画の人气が上がって収益ができれば、動画の投資家にコインで返すことができるようになる。そうすれば、あえてグーグルから広告収入を得るためにユーチューブのプラットフォームを利用する必要がなくなる。」

ブロックチェーン技術のキーポイントは「ミドルマン」である中間業者が必要なくなることだ。ブロックチェーン技術を活用すれば、全てのものが透明に取引でき、透明に利益が返ってくる。まだアイデアのレベルだが、私はこのようなやり方で自分が作った立体物の中に入って行き、世界の情報をどうにかして自分の事業まで結び付けようとしている最中だ。小さな点が集まれば、秩序になって自分が介入する瞬間、秩序はチャンスに変わる。

しっかりと見れば、アンタクという点も見える。すでに私たちの日常の隅々まで入り込んでいるため、もはや誰にでも見える大きな点だ。すると「新型コロナウイルス感染症により、ネットフリックスのようなコンテンツビジネスが人気だ」という記事が見える。また一つの重要な点を発見したのでメモしておく。そして数日後、未来学者の崔允植<sup>チェ・ユンシク</sup>博士に会ったが、ちょうどこのような話をしてくれ

た。

「新型コロナウイルス感染症によりAI技術の速度がはるかに早くなり、外国語の通翻訳が数年以内にはほぼ完璧になります。国家間の言葉の壁が無くなるとみていいです。」

インタクト-コンテンツビジネス-AI、このように三つの点を結んで最後に自分と結び付けてみると、このような考えが姿を現した。新型コロナウイルス感染症により人々家にいる時間が増え、コンテンツビジネスが成長している。これからは良質なコンテンツを持つ人が価値を認められる時代だ。今後、AIの開発で言葉の壁がほぼなくなれば、私のコンテンツもいくらかでも海外市場に進出できる。海外進出の敷居が一気に低くなるのだ。そうだとすれば、英米圏だけでなく全世界の人々に私の講義を伝えることも可能になるのだ。そうだとすれば、私は今からどんな準備をすべきだろうか。

## 混沌の中で見つけた衝撃の真実

私は新型コロナウイルス感染症以降、新たに発見した点を線で、立体で、そして、自分自身にひたすら結び付けてみた。それが数か月間、私が昼夜を問わずにしてきたことだ。ところが、結び付ければ付けるほど「深刻な真実」と向き合わなければならなかった。数か月、取り組んだ後になって私はようやく気付いた。今の大きな混沌の中にとてつもない秩序が「すでに」作られているということ。さらに、その規模と速度は私の予想をはるかに上回っていた。最も衝撃的だったことは、私も気付かないうちにこの秩序の「外に」押し出されていたという事実だ。

- ・ 人にそっくりで、人のように感情を表現し、会話ができるデジタル人工人間「ネオン(Neon)」が登場した。ネオンは、特定の業務をサポートできるようにパーソナライゼーションをすることができ、今後、教師、俳優、銀行員、アナウンサーなどの役割を任せることができる。
- ・ 食品を注文するAI冷蔵庫が登場した。冷蔵庫内のカメラで食品を確認し、牛乳のようによく注文する品目は、自らの判断で買い時を予想して注文する。
- ・ 席の案内から料理、皿洗いまでいっぺんにしてくれる食堂ロボットが登場した。

・都心の交通渋滞を解決してくれる空飛ぶ「フライングタクシー」が登場した。

このようなニュースに疎いなら、映画の中の話のように感じるなら、あなたも以前の私と同じ状態だという話だ。上に列挙した製品は、わずか数か月前に開かれた世界最大の最先端製品博覧会（消費者向け家電の見本市）で初めて披露されたものたちだ。サムスン、LG、現代自動車など、国内企業で開発された製品も多く、大部分が実用化を間近に控えている状態だ。ビッグデータ、ロボット、AI、ブロックチェーン、ナノテクノロジー、IoT、5G通信、3Dプリンター、自動運転技術搭載車、ドローン、ここに生命工学、宇宙工学、環境工学など、数えきれない多くのデジタル技術が、金融、国家、企業とお互いに競争して融合し、驚くような速度で世界を変えている。その規模は全世界的で、速度も速いので個人では何が起っているのか、正確に気付くことができない。しかも、勉強が習慣の人生で、トレンドに敏感な自己啓発講師である私でさえもだ。パンデミックというサイレンが鳴っていなかったら、私はこのような世界が来ることも知らないまま世界の秩序から外れていただろう。

### 「構図が変わる3度目のチャンスが来る」

すでに私たちの側に近づいてきた全く違う未来は、一時的に新型コロナウイルス感染症の嵐の中に姿を隠した。人々は、完全に目の前に押し寄せる新型コロナウイルス感染症だけに気を取られている。しかし、恐ろしいのは新型コロナウイルス感染症ではない。新型コロナウイルス感染症という巨大な嵐の中で加速し、猛スピードで碎けて合体し、連結され、何段階かずつ引き上げられている私たちの未来だ。混沌の嵐が過ぎ去った後、最後にゆっくり姿を現すその秩序はすでに姿をしっかりと整えつつある。

少数の人々はこの秩序に一足早く気づき、それに合わせて事業を再編している。また、ある人々は、捨てるものは捨て、手にするものは手にし、未来の秩序への移住を準備している。秩序が姿をはっきりと現す頃になれば、資本もその中に吸い込まれるだろう。国内最高のブロックチェーンの専門家である、高麗大学コンピューター工学科イン・ホ教授は、このように話している。

「アナログからデジタルに変わる時、「構図」が変わると表現するのです。そのような時は

アナログの強者が一瞬で勢いを失い、デジタルの強者が現れます。デジタルカメラが登場し、コダック<sup>10)</sup>の株が紙切れになりました。一方、パソコンの登場でマイクロソフトはとてつもなく豊かになり、インターネットが日常的なものとなり、グーグルが世界最高の企業になったでしょう。今、三度目の構図が変わるチャンスが訪れています。このチャンスを逃してはダメです。」

混沌が大きければ、チャンスも大きい。すでに準備している人々の富は、今よりもさらに3倍は増えるだろう。同時に二極化も深刻になるだろう。チャンスを掴んだ人々はさらに富を成し、チャンスを逃した人々はさらに貧しくなるだろう。新型コロナウイルス感染症と共に第四次産業革命の嵐が襲い、過ぎ去った後には貧富の格差がもっと深刻になる可能性が高い。多くの職業において、機械とデジタルが人間に取って代わるためだ。秩序の外に押し出される人々は多数だ。少数だけが富の列車を占領する。押し出された多くの人々がさらに少ないお金を巡り、競争する秩序外アウトサイダーの世界には果たしてどのようなチャンスが残っているのだろうか。考えるだけでも絶望的だ。

考えてみると、1997年のアジア通貨危機の時もそうだった。私は何が起っているのかもわからず、経済危機の嵐に正面から襲われた。苦勞して手に入れたアパートを丸ごと失い、チョンセ<sup>11)</sup>のお金さえも無くなり、地方に引っ越して借家暮らしを始めなければならなかった。アジア通貨危機が落ち着いた頃、お金持ちが家一軒の値段で三軒を買い、さらにお金持ちになったという記事を読んだ。チャンスを掴んだお金もちがとても羨ましくて、ウォルセ<sup>12)</sup>の心配をしている自分が情けなくて、しばらく号泣した。私にとってアジア通貨危機は惨めな失敗であり、悪夢だった。混沌の中にも新たな秩序があるという考えに気付く余裕もなかった。

ところが、今や私は57歳のキム・ミギョンだ。およそ20人の社員の生活の責任を背負う社長だ。今回ばかりは、同じ失敗を繰り返すことはできなかった。背筋が凍るような真実と向き合った瞬間から、私は勉強する速度を上げた。本を読み、専門家に会い、線を引ながら、新聞を読んだ。点と線を発見し、自分と結び付ける練習をひたすら繰り返した。将来、涙を流したくなければ、今すぐにはできることは勉強しかない。

幸にも数多くの未来の点を発見し、結んでみると私の目にも徐々に秩序が見え始めた。無

10)訳注 アメリカ合衆国に本社を置く、世界最大の写真用品メーカー

11)訳注 まとまった額の保証金を入居時に支払うことで、家賃なしで居住できる形式

12)訳注 日本と同様に、毎月一定の家賃を支払い居住する形式

数の点の動きが全てわからなくても、少なくとも自分と関連する世界だけほどのように回っているのか、次第にはっきりと見ることができるようになった。その点を自分に持ってきて、数多くの線で結び、ようやく私のアイデアも少しずつ三次元の立体物になっていった。その立体物の面積の分だけ自分だけの秩序が作られ、その秩序の中で生き生きとしたエネルギーも大きくなっている。

### タイムリミットは残り少ない

最近、私たちの会社は以前にはなかった速度で前進している。新たな人材を雇い、新たなビジネスを作って投資し、挑戦を続けている。小さなコンテンツ企業だった会社はデジタルメディア会社に形を変えているところだ。普段、時速80キロで走っているとするならば、今は時速120キロだ。

混沌の中で秩序を発見した後から私は焦り始めた。もう時間はあまり残っていなかった。大多数の人は知らないだろうが、今、私たちは「タイムリミット」に近づいている。新型コロナウイルス感染症が全世界を激しく揺さぶるほどの巨大な混沌であり、未来を早める材料がかなり多く揃っているため、新たな未来は予想よりもさらに早く到来するだろう。

経済の専門家たちは、ワクチンができるまでがチャンスをつかむタイムリミットだと予想している。混沌がピークに達すれば、次第に隠れていた秩序が姿を現し始めるだろう。そして、誰もが「これがニューノーマルなのか」と認識した瞬間、すでに市場は新たな構図に変わっているだろう。遅ればこれ以上入っていく場所はない。タイムリミットが終わるホイッスルが鳴る前に、私もあなたもこの混沌の中心に入っていく必要がある。最低限、自分と雇用とビジネスを保てるほどの小さな秩序くらいは作るべきだ。

あなたの目の前にも白い水蒸気が充満するだろう。狂ったように揺れ動く気体を正面から凝視しよう。その中に隠れている点が見えるなら、まだあなたにチャンスがある。その点を自分と結び付けることができれば、新たな秩序の主体になれる。しかし、いくら見ても一寸先も見えないのならば、選択肢は二つだ。このまま永遠に秩序の外に押し出されるか、あるいは今から走り出すか。前者を選択したならば、未練なくこの本を閉じることを願う。しかし、大変でも後者を

選択したのならば、一つ約束したい。あなたは自ら秩序を見つけ出してチャンスも作り出すだろう。混沌という嵐の中へ勇敢な一步を踏み出すならば。

### 3. 「講義に行けないわけではない。行かないのだ」

あなたは新型コロナウイルス感染症を「心で」受け入れたのか

私はこの数か月間、多くの人々に会った。有識者や企業のCEO、もしくはその分野で一流とされる専門家たちだった。彼らならすでに解答を持っているのではないか。世界がどのように変化するのか知っているのではないか。おそらく多くの人々が私のように考えるだろう。しかし、私は彼らと話をすればするほど、違う確信を持つようになった。

「知っている人はほとんどいないのね！」

あらゆる専門家に会ってみたが、新型コロナウイルス感染症以降の世界がどうなるのか、自分なりの情報と理論を基に説得力のある分析をする人はほとんどいなかった。さらに、自分の仕事と事業においても同様だった。最低でもいくつかの点くらいは結び付け、自分の事業を予測し、導いていると思ったが違っていた。

一体、この賢くて情熱溢れる人々に何が起っているのだろうか。簡単に解答を導き出せない理由は「変化した公式」のためだった。新型コロナウイルス感染症は世界の「構図」自体を完全に変えてしまった。構図が変わり、人生の公式も突然複雑になった。以前は人が好きなもの、人が集まる場所、お金の集まる場所、うまく売る方法がはっきりしていた。以前に代入していた公式に若干の革新を加えれば、いくらでも生計を立てることができた。

ところが、新型コロナウイルス感染症により既存の公式が消えてなくなり、新たな公式が入ってきた。アンタクト、デジタルなど、見慣れない公式が登場し、生業を激しく揺さぶってしまうと戸惑い混乱する。この公式をどうにかして代入してみたいが思ったよりも難しく複雑だ。そのような時「まさか」という疑念まで抱くようになる。

「まさか、会社が潰れるわけがないでしょう？」

「まさか、この事業が無くなるわけがないでしょ？ ここで働き、生計を立てる社員が何人もいるのに…」

多くの人が働く分野ほどこのように考えやすい。誰か賢い人が革新的な解決策を作り出すか、どうしてもダメなら政府が対策を打ち出さだろうと思う。しかし、これはあまりにも安易な考えだ。全体の事業の中で一か所だけ打撃を受けたならそうかもしれない。しかし、ウイルスは航空、旅行、教育、映画や公演、大型ショッピングモール、自営業、など、数えきれない領域を生存の岐路に立たせている。構図がひっくり返される大きな嵐に直面したことで、みんな余力がない。自分の生きる道は自分で見つけ出すしかない状況だ。

既得権を持っている人であるほど状況を正面から見ることは難しい。私が今まで守ってきたお金を稼ぐ確実な基盤と公式、習慣をやめようとする怖くなって後退りする。一言で頭の中が「混乱する」という表現がぴったり合う。だから変わった世界の公式にしっかりと踏み込めないのだ。私は結局、このような結論を出した。

「私たちは新型コロナウイルス感染症以降の世界をよくわかっていないだけでなく、まだ心で受け入れていなかった。」

ひょっとしたら、縮み上がって動けないことが人間の自然な反応なのかもしれない。危機を前にして萎縮し、逃げ出したいくなるのも私たちの本能のうちの一つだ。しかし、そのたびに忘れてはならない一つのこと。あなたがうろたえている間に「次の嵐」が近づいているという事実を。

今年の下半期になれば、予想されていた全てのことが現実のものとなるだろう。一時的だと信じていた多くのものが現実のものとなるだろう。子供たちは相変わらず学校に行けないかもしれないし、映画館は今の開店休業状態からさらに悪化し、閉館するかもしれない。無給休職は大量の解雇につながるかもしれない。どんな会社でも6か月は耐えられても、2年を持ち堪えることはできない。個人も同様だ。企業も個人も破産したり、生き残るために業種を変えなければならぬ瞬間がすぐにくる。しかし、これからは自らに対して、真剣に問いかける必要がある。

「自分は、本当に新型コロナウイルス感染症以降の世界を自分の人生として受け入れたのか。この危機を自分の力で必ず解決すると本気で決心したのか。」

## お金持ちだけが知る「ハイレベル情報」

数日前、投資ファンド業界でとても有名なファンドマネージャーに会った。新型コロナウイルス感染症以降の株式市場の見通しが気になり尋ねてみると、意味深い話を聞かせてくれた。

「今、お金持ちはこの状況をものすごいチャンスと見ています。単純に株価が下がったから安く買えるということではないですよ。新型コロナウイルス感染症で一度リセットされ、新たな成長の原動力が生じたためでしょう。アンタクトの世界になって、突然必要なものが多くなりましたよね。勉強も、ショッピングも、医療も全て変わったので供給するものが増え、それが全てお金になるということでしょう。関連企業は喜び、つられてお金持ちも喜んでいて。どこに投資すべきかハイレベル情報を得ようと血眼になっていますよ。」

やはり、お金持ちは「危機はまさにお金を稼ぐチャンス」という言葉を胸に刻んでいるようだ。彼らはお金の流れに敏感で、お金がたくさんあるので素早く投資ができ、多少の冒険も甘受できる。そして、個人が絶対に得ることができないハイレベル情報まで持っているのだから、今回も危機がさらなるチャンスになるだろう。

そうだとすれば、私たち平凡な個人はどうだろうか。今回も1997年のアジア通貨危機の時のように、2008年の世界金融危機の時のように、つらい目にあうのだろうか。マスクを着けるのが煩わしいと文句ばかり言って一足遅い選択をし、逃したチャンスを一生後悔し、お金持ちをねたむのだろうか。私は新型コロナウイルス感染症以降、二極化が深刻になるだろうという記事を読むたびに心が痛む。これまで、誠実に働いて自分の夢を切り開いてきた人々が新型コロナウイルス感染症の嵐の中で道を見失い、挫折するかもしれないから。過去の私のように知らないうちに秩序の外に押し出され、永遠にアウトサイダーになるかもしれないから。

しかし、私たちにも一つの「ハイレベル情報」がある。私はこれこそが最高の情報だと思う。新型コロナウイルス感染症以降、災禍がどれほど深刻なのか「正確に」知ること、危機がどれほど深刻なのかに気付くことこそが最も重要なハイレベル情報だ。深刻な危機だと判断したということは世界の変化に関して、とても勉強したという意味だからだ。勉強するほど見えるのが危機だ。それほど価値のあるハイレベル情報であるため、危機は誰にでも知らされるわけではない。企業でも新型コロナウイルス感染症以降の危機と対処法については、まず役員レベルで共有する。万が一、あなたが今を危機だと確実に認識したならば、あなたはすでにハ

レベル情報に近づいている状態だ。

誰もあなたのためにわざわざ情報をくれたりしない。だけれども、今は自分がすぐに動けば、いくらでも情報を得ることができる時代だ。ニュース、各種レポート、ユーチューブ、本などに数多くの端緒が散らばっている。この情報を一つ一つつなげ、秩序を把握して公式を作れば、それが自分にとって最も価値のあるハイレベル情報になる。勉強をするほど得れるのがハイレベル情報だ。今は危機を勉強するべき時だ。

## 教育と不動産の公式が変わる

新型コロナウイルス感染症で変わった公式は生業に限った話ではない。日常で起こる数多くの選択にも影響を与える。数日前、親しい後輩が私のもとを訪れて尋ねた。

「今、上の子が中学生になったので、<sup>テチドン</sup>大地洞に引っ越すつもりですけど、どう思いますか。無理すればできるとは思いますが、築30年のマンションですごく古いのですよ。」

「ちょっと、それは良くないと思うけど？ 子供のためにも、不動産として賢い投資ではないわ。新型コロナウイルス感染症以降、教育と不動産の市場がどのような方向に動いていくのか、一度考えてみましょう。」

心配そうな顔をした後輩に伝えた私の考えは、このようなものだった。

今までの母親たちの子供の教育方式は、はっきりしていた。「子供を<sup>カンナム</sup>江南で育て、ソウル大学や<sup>ヨンセ</sup>延世大学、<sup>コリョ</sup>高麗大学に進学させる。」不動産投資の公式も単純だった。「それゆえ、江南第8学郡<sup>13)</sup>の住宅価格は、一度上がれば絶対に下がることはない。チャンスがあれば江南のマンションを買え。」誰も抗うことのできない絶対普遍の真理だった。

しかし、この公式に亀裂が入り始めている。朝起きたら新たなデジタル技術が登場し、技術同士でもとてつもない速度で融合している。企業がついて行く速度に学校は到底ついて行けない。大学でコンピューター工学を4年間、一生懸命学んでも仕方がない。卒業する頃

---

13)訳注 ソウル市カンナム(江南)にあるお金持ちの子供や成績が優秀な子供が通う学校が多い学区

には、技術が何倍も進んでいるだろうし、学校で学んだことはすでに使い道がなくなっているのに。企業からしても、あえて高い年俵を支払って高学歴の人材を採用する理由もない。

## 「江南不敗」神話が崩れる

『フォノ・サピエンス』の著者である<sup>ソンギョングァン</sup>成均館大学機械工学部、<sup>チエ・ジェフン</sup>崔在鵬教授は、企業が望む未来の人材について、このような話を聞かせてくれたことがある。

「数日前、小学校4年生の子がドローンのレース大会に出場し、大人の参加者たちを破って優勝しました。調べてみると、全校生徒が14人の田舎の学校の生徒で、ユーチューブを見て独学でドローンを始めたというのです。今、この子がユーチューブで勉強していることは何だと思いますか？ プログラミングとAIです。自律飛行型ドローンを自ら開発しています。私が会社のCEOなら当然このような学生を採用しますよね？ 実際に最近、成長著しいIT企業は学歴を見ません。余裕がないからすぐ現場で活躍できる実力が最も重要だということでしょう。」

このような公式はこれから一般化するだろうし、新型コロナウイルス感染症によってさらに早まる。そうだとすれば、江南第8学郡と大地洞の塾が密集する地域の様子も近いうちに変わるだろう。その上、オンライン授業まで日常になってしまえば、江南の名門高校に何の意味があるのか。あえて価格の高い江南のマンションに暮らし、高い授業料を支払う意味はない。そうなれば、自然と不動産市場も変わるだろう。「江南不敗」神話が崩れる日が近いということだ。

さらに、長期的には都市密集マンションの不動産価値も慎重に見守る必要がある。感染症に最も脆弱な場所がまさに都心のマンションだからである。団地内で感染者が発生すれば、数百人の団地の居住者がいっぺんにパニックに陥る。専門家の間ではすでにマンションではない一戸建てやタウンハウスに対する人気度が高まっており、郊外の新都市の需要が増えるだろうという見通しが出ている。そこには、在宅勤務という勤務形態の変化も一役買っている。

どこでどのように子供を育てるのか、どこへ引っ越しするのかは、私たちの未来に関わる重要な選択だ。今のような過度期には多くの人が過去の公式通りに未来を決定する。過去を越えてきたばかりで、未来に対する確信がないため、以前の公式に従うのだ。ところが、日常でしてきた人生の様々な選択さえも新たな公式を導入しないと計算が合わないかもしれない。子供のための選択がかえって子供の未来の障壁になるかもしれないし、家族の未来のための重要な投資が大きな損失に繋がるかも知れない。

新型コロナウイルス感染症以降の変化した公式から逃れられる人は誰もいない。従って、早く新たな公式を理解し、様々な影響を計算しなければならない。今後は、少なくとも1～2年の変化を予測しながら新たな人生設計と選択を続けていかなければならない。

ようやく危機の深刻さに気付いたのなら、そして、変化について行くことに決めたのならば、おそらく最初に押し寄せる感情は不安感だろう。目にはっきりと見えない、ものすごい嵐のシルエットが私たちを縮み上がらせるだろう。どこからどこまでを深く勉強すべきか、途方に暮れるばかりだ。しかし、このように考えてみてはどうだろうか。一個人が世界全体を把握することはできない。だから、世界の大きな軸だけ把握して、本当に重要な自分の世界と関連するものだけを丹念に調べれば大丈夫だと。とても小さなものかもしれないが、自分一人生きて行くだけでも、自分一人食べて暮らしていける分だけでも理解して把握すればいいということだ。

近づく未来をしっかりと調べることもせずに怖がって萎縮する必要はない。すでに私たちは、各自の生業で数多くの危機を乗り越えてきた。その度に学び、変化し、生存し、成長してきた。過去の危機が学校の間テストくらいだったとすれば、今の新型コロナウイルス感染症は大学入試のセンター試験本番のつもりで準備すればいい。緊張して荷が重いかもしれないがやってみるだけの価値はある挑戦だ。結局、このすべてのことも人間が作ったことであるからだ。

**「できない」ではなく「やらない」と宣言しろ**

すでに読者の中には、新型コロナウイルス感染症を全身で経験している方も少なくないだろう。もし、新型コロナウイルス感染症によりやっていた仕事ができなくなった方がいるならば、こ

の話を必ずしたい。いくら考えても以前に戻ることができないのなら、もう「できない」という言葉はやめよう。その代わりに「やらない」と宣言してみよう。

私は新型コロナウイルス感染症が広がってから1か月ほど後に、社員の前でこのように宣言した。

「私はこれから講義に行けないのではなくて「行かない」のです。」

講義が無くなって1か月間、私が最も多く言った言葉が「新型コロナウイルス感染症のせいで講義に行けない」だった。人々から声を掛けられる度に「行けない」という言葉だけを繰り返した。ところがある瞬間、自分自身に苛立った。

「行けないという言葉は被害者の言葉でしょ。新型コロナウイルス感染症に奪われて、行き詰まったという言葉でしょ。解決しようとする意思のかけらもない答えだよな？ 1か月間言ったら十分だわ。情けなく思いながらこの言葉をずっと続けろってこと？ どうやってでも方法を見つけ出さないと講義に行けないことが何の自慢だっていうの!？」。

私は弱々しい敗者の弁ではなく、この状況を主体的に解決していく勝者の弁をしたかった。誇りが溢れるこのような言葉。

「新型コロナウイルス感染症のせいで集まることも大変で、危険な状況を作ることも嫌なので、私はもう講義に行かないことにしました。」

すると、人々は必ず尋ねる。

「講義に行かないなら、どうされるのですか。会社は大丈夫ですか。」

講義に行けないと言ったら、慰められることはあってもこのような質問はされなかつただろう。できないことには対策がないから。ところが、行かないと言ったら必ず対策が無いのか質問するようになる。答えなければならぬ自分もまた、死に物狂いで対策を探すようになっていく。私は行かないと宣言したその日から社員と対策を見つけ出すことを始めた。講義に行かなくても会社に影響のない方法。オフライン講義に行かなくても講義ができる方法。そうしているうちに自然と勉強になり、新たな道を見つけた。

重要なことは「できない」を「やらない」に変える発想の転換だ。被害を被る対象から被害を解決する主体に考えを変えるだけでも、私たちは自ら対策を探し始める。どのような状況でも自分の人生の主導権を奪われてはダメだ。新型コロナウイルス感染症なんかには負けないようにしよう。

そして、誇りを持って宣言しよう。

「できないのではなく、やらないのだ。そして、この危機は必ず自分の力で解決する！」

## エピローグ

### 私も新型コロナウイルス感染症以前の世界に戻りたい

執筆を終えた日曜日の午後、アイスコーヒーを一杯入れて原稿を初めから終わりまでもう一度読んでみました。いつも脱稿する時、少し心残りなのは変わらないようです。「もう1週間だけ時間があればいいのに」という心残りです。今回も例外ではありませんでした。ところが、もう一方で感じるこのつらい気分は何でしょうか。

「この本を書く必要がなかったら、どれほどよかったですか。」

せっかく苦勞して全て書き終えた本なのに、どうしてそんな思いが浮かぶのでしょうか。実は「キム・ミギョンのレポート」は全く計画に無かった本です。新型コロナウイルス感染症さえなかったら生まれなかった本でしょう。だから、あまりにもつらくて物悲しい気持までにまでなるのです。

正直に言うと、私は毎日恋しいです。そして、戻りたいです。新型コロナウイルス感染症以前の世界に。誰かが私に選択権をくれるならば、私は新型コロナウイルス感染症以前の世界を躊躇なく選ぶことでしょ。いくら危機がチャンスだとしても、危機のない平穏な日常にはかなわないでしょう。その上、新型コロナウイルス感染症以降の世界はとても速く進化しており、追いつくためには今まで使ったことのないところまで頭を使う必要があります。デジタルトランスフォーメーション、人工知能、ブロックチェーン、このようなものについて知る必要がありますが、正直、用語も難しく一言でいうと大変です。新型コロナウイルス感染症さえなかったらうまく避けて、10年ぐらいはこれまで通りの方法で満足に暮らし、一線を退いていただろうに、今はもう学ばないで知らずにいると1年も持ち堪えられずに被害を被る可能性が避けられなくなりましたよね。

仕方なく新たに学ぶべきものが多く、苛立ち、やり遂げられるだろうかと不安になったりもします。そうこうしながらも、我にかえて「人生ってそんなものだろう、できないことは何もない」と開き直って必死に耐えているところです。

しかし、時折り新型コロナウイルス感染症以前の日常が思い浮かぶと、物悲しさが押し寄せます。この世界に人に会って楽しくおしゃべりして、ご飯を食べて、手を握って、背中を叩き合って、つらければ気の合う人とふらっと旅行に行くことよりも楽しいことがあるでしょうか。ぶつかり合ってぎくしゃくすることもあります。それでも顔を見て直接会い、付き合うことが本当の意味で生きるということではないでしょうか。

私はその時間が恋しくなった時には1年前、およそ1000人の聴衆の前でウキウキしながら講義をしていた写真を見ます。ソーシャルディスタンスなんてなく、ぎゅっとくっついて座る人々、拍手をして泣き笑ったあのすごい熱気、そして、そのシーンの中の私。何度も見ると憂鬱になるのでたまに見ます。およそ30年間、ほぼ毎日していたことで私が最も愛していたことが、今や写真だけの思い出となりました。

仕事が人生と言えるような生き方をしてきた人々は、わかるでしょう。それは「残念」という表現ではとうてい説明できない感情です。まるで、片腕、片足がちぎれるような心情、愛する子供を置いてきたような痛ましさに近いものです。

今も、2020年2月に私が感じた感情が鮮明に思い浮かびます。講義がなかったある日、そして、今後もずっと講義がないことにはっきりと気付いたあの日です。同じ会社に出勤し、顔を合わせる社員も同様で、突然見慣れない場所に来ている感じがしました。私は一瞬で、違う世界に押し流されるように違う世界に来てしまったのです。

その時の、あの苦しくて悲しい感情は、まさに「喪失感」でした。私が最も愛するものを一瞬で奪われてしまったような無念さ。その深い悲しみ。そして、同時に私を挫折させる数万の感情に襲われました。会社も責任を取れない私がふがいない人間に見えて、何もできずに1日1日、お金だけを使っていく状況を見ていると息が詰まりました。人が挫折するのは一瞬のようです。

今、多くの人々が経験している感情も似たようなものでしょう。私たちは新型コロナウイルス感染症以前の世界に愛するものを置いてきました。誰もが一つくらいは大切なものを失ったでしょう。友だちと笑いながらはしゃいだ大切な日常、夢のより所だった会社と大切な仲間、生存の基盤だった店とお客さんたち、舞台上で観客と過ごした時間…。その時間を丸ごと奪われてしまった今、私たちが感じていることはひどい喪失感です。私もまた、この感情を経て、何度も戻

りたかったですし、本当に現実を受け入れたくありませんでした。

ところが、新型コロナウイルス感染症以降の世界はすでに素早く定着し、新たな秩序を作っていることがわかった瞬間、これ以上喪失感にさいなまれている時間はありませんでした。私の家族、私の会社、絶対に守らなければいけないものがあったからです。

それぞれが感じる喪失感の程度と失ってしまったものは全て違いますが、一つだけ私たちが失わなかったものがあります。全てのものを失っても「自分」は失っていませんでした。30年間、舞台上で講義してきた講師金美暎の時間は消えましたが、金美暎という存在が消えたわけではないようにです。私は相変わらず以前のような日常を送り、些細な夢を抱き、新たな世界でもまともな人間として生きるために努力しています。

あなたが愛したその時間は消えたけれど、あなたは変わらずそのままです。私たちを取り囲む世界が変わっただけで、私たちは変わっていません。愛する人も、守るべき仕事場も、そして、恥ずかしくない人として生きたいというささやかな願いも変わらずそのままです。

年をとれば心配が増えるというのは正しいようです。本を書いている間、新型コロナウイルス感染症以降の世界について知れば知るほど、全ての人々が心配になりました。学校の先生に会ってきたら、エドテックに適応しなければならぬだろうにどうしようと心配し、映画に携わる後輩に会ってきたら、映画館はなかなか営業再開できないだろうにどうしようと心配しました。この間、出席した同窓会では会う友達ごとにデジタルの世界に早く適応すべきだと、口をすっぱくして言いました。

この本は、そんなふうに関心する人々を頭の中に思い浮かべて書きました。現在している仕事、未来への夢、生計を立てる全ての方々、この急激な変化に後ずさりせず、諦めず、それぞれの夢と人生をもう一度始めることを願う気持ちで書きました。また、未来を生きていく私の子供たちと青年たちを思いました。誰よりも躍動的に学び、未来を生きていく学生たちと青年たちに、目の前に何が迫っているのか知らせてあげたかったのです。これといったロールモデルがまだ登場していない新たな世界で自らがロールモデルになるべきだからです。

さあ、再び立ち上がる時間です。それぞれの喪失感から、恐怖から、私たちが立ちすくんでいるそこから、勇気を出して出発しなければなりません。「新型コロナウイルス感染症以降」という変わった世界でも、私たちがそれぞれの夢と人生をもう一度続けなければなりません。

「キム・ミギョンのリポート」が「あなたのリポート」になることを心から願っています。

先日、インスタグラムに短い投稿をしました。

「大変でしょう。私たちは一人ではありません。やり遂げることができます。心配いりません。」

ところが、コメントを読み進めながら私の方が泣きそうになりました。みんな何だかわからない不安感と喪失感に縮み上がっていたようです。「心配いりません」という言葉にこんなにも多くの共感のコメントが書き込まれるとは思っていませんでした。

この本の最後に、読者のみなさんにもこの言葉を伝えたいです。

「私たちはやり遂げられます。だから心配いりません。」

## 日本語抄録

本稿は著者のキム・ミギョンが書いた「キム・ミギョンのレポート」を翻訳したものだ。

本稿では「新型コロナウイルスによって世界は変わり、もう以前の世界には戻れない。私たちは以前とは全く別の人生、誰も経験したことのない世界で生きていかなければいけない。」このような危機の中でどのように生きていくかについていくつかの方法を紹介し、力強いメッセージと共に読者に希望と勇気を与えるものである。

本稿では原書のうち「プロローグ」、「大転換を恐れるな」、「エピローグ」を翻訳した。

「プロローグ」では、新型コロナウイルス感染症により変わりゆく世界で、著者が気付いたことを読者にも伝えたいという想いが書かれている。

「Part 1. 大転換を恐れるな」では、著者が実際に感じたことを通じて、読者に新たな世界を恐れるのではなく、新たな秩序に気づき、勉強することで解決策を見つけることができるだろうという、実体験に基づいたアドバイスが書かれている。

「エピローグ」では、この本を執筆しながら感じた著者の想い、そして、読者に対するエールのこもったメッセージが書かれている。